

『目からウロコの海外資料館めぐり』

著者：三輪宗弘

所属：九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻
兼、九州大学附属図書館付設記録資料館 産業経済資料部門教授

発行所：クロスカルチャー出版

発行日：2019年6月30日

ISBN978-4-908823-58-9 1800円＋税



本書は、九州大学図書館のホームページで紹介していた海外のアーカイブズや図書館の資料調査に役に立つ情報を、一部加筆して一冊にまとめたものである。そのねらいとは、若い研究者が海外資料館へ行く不安を少しでも緩和してあげたいという教師としての熱意と思えるが、それだけではない。「研究論文を執筆する際には、一次資料にあたりそれが事実であるかどうかを常に問いながら組み立て、さらに他人の論文を読む際は、それが二次資料で展開されていないか、常に意識して文献を読む習慣を身につける⁶⁾」ことが大切であり、「その論拠となった資料を手に取りながら読むことで、(中略)公平に史資料を扱った論文か、恣意的に資料が用いられていないかを、確かめる必要がある⁷⁾」という研究姿勢の厳しさを伝えている。

⁶ 本書「はしがき」3頁

⁷ 本書「はしがき」1-2頁

著者の研究対象は石炭や石油というエネルギー資源と安全保障である。しかも戦時経済における資源の国際関係について言及するにあたり、海外各地の資料館をめぐり、軍事や安全保障に関する情報を縦横に関係づける努力をしてきた。⁸⁾その収集過程では、情報の非公開期間や、改ざん、捏造ということにも遭遇し、何が真実であるか各館所蔵の資料を比較し、裏をとりながら真実を解明する必要があった。それで結果的に多くの資料館を巡ることになり、当時から現在に至る情報アクセスの体験に基づいて、本書は執筆されている。

最近ではデジタルアーカイブの利用で海外のアーカイブズ情報をネットで入手することも可能となってきた。それらの公開情報をまず国内で入手し、現地調査のターゲットを絞り Box 番号を割り出せるような準備をしてから現地へ赴けば、限られた時間の中で詳細な調査を進めることができると提案している。現地調査では、予算の関係で滞在日数と調査時間が制限されるため、資料館への交通アクセス、近隣滞在可能ホテル、館の利用時間、入館手続き、資料申請方法、休憩場所等、心構えとして予測でき得るあらゆる情報を提供している。本書から情報を入手し参照すれば、調査は効率的に進めることができるであろう。評者は2014年8月に、SAA(Society of American Archivist)年次大会のリサーチ・フォーラムに出席した合間のたった一日の日程で、ワシントンDC、カレッジパークの米国国立公文書館IIにひとり調査に行った経験があるが、もし本書を事前に読んでいたら感じなくてもよかった様々な困惑と緊張感を思い出し、目からウロコであった。

本書の執筆対象の資料館は、米国が11館で全体の約49%(80頁)を占め、さらに英国3館、仏国1館、独国4館、豪州3館、韓国4館、中国2館である。これだけ多くの館について一挙にまとめて記載されたガイドブックは、いままでなかった。各資料館における利用者の受け入れ態勢も異なり、初めて訪問すれば戸惑うことも多い。本書では、入館してから閲覧室に入るまでの細かな事務手続きや、座席指定、アーキビストへの相談方法、申請ボックスの制限数、一日における資料申請のタイミング、資料番号をエビデンスとしてメモ保存すること、コピー、スキャニング、持参カメラの利用時の注意点、収集情報の取り込みや整理まで書かれている。米国国立公文書館IIでは、アーキビストで日本語が読める Eric Vanslander 氏のメールアドレスが紹介され、「事前相談も日本語で可能」とか「閲覧室のPC内のFinding Aidsの使い方」等の説明がされており、貴重な情報と思われる⁹⁾。13頁には米国国立公文書館が所蔵するRGのPC検索画面のアイコンの写真もある。それ以外の館でも、事前相談受付のメールアドレスや参照すべきホームページのURLが記されている。また、各館について同様のガイドが記されている先行研究者の書籍も紹介している。

最後に、利用者の視点から書かれている本書は、裏返せば、国内のアーカイブズや図書館における利用マニュアルを見直す資料としても読むことができる。海外資料館におけるサービス内容を見ると、参考となる点も多い。きめ細かなサービス提供ばかりかと思うと、「資料の破損を見つけたらフィードバックしてください¹⁰⁾」のように、利用者による資料の改善協力を求めることも散見され、アーカイブズ・マネジメント上、参考になるだろう。さらに資料の非公開(機密・秘密指定)があるが故に、資料が残り、後日公開可能となるのだが、秘密指定(一定期間非公開)の重要性について著者は「はしがき」「あとがき」で示唆している。2026年に新たな国立公文書館における設備計画¹¹⁾が発表されているが、収蔵スペースの拡大だけでなく、利用者が使い易い施設管理とサービス内容の検討のためにも、本書が参考になることを願っている。

(推薦：レコーズ&アーカイブズ マネジメント コンサルタント
記録の森研究所代表 齋藤柳子)

⁸ 本書「あとがき」160-161頁

⁹ 本書11-12頁

¹⁰ 本書105頁

¹¹ 内閣府「新たな国立公文書館建設に関する基本計画(概要)」資料2-1

<https://www8.cao.go.jp/chosen/koubun/kontou/20180329/shiryou2/1.pdf#search=%E5%9B%BD%E7%AB%8B%E5%85%AC%E6%96%87%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E6%96%B0%E9%A4%A8%E8%A8%88%E7%94%BB>

資料によって、相手が何を考えていたのか 理解でき、様々な解釈ができる

図書館で資料調査するのに、役立つような情報を記載

村木 哲



三輪宗弘 著
▶60からウロコの海外資料館めぐり
G・30刊 A5判172頁 本体1800円
クロスカルチャー出版



わたしは、かつてと違って、三十年前のことになるが、江藤淳(一九三〇〜一九九〇)の著書『閉ざれた言語空間』(文藝春秋刊、一九八九年)に接して、そこで次のように記されていたことのある種の驚きを感じたことをいまだによく覚えている。

「昭和五十四年秋から、昭和五十五年春にかけての約半年間、私は、ワシントンの中に在るウィルソン研究所(略)から、メリーランド大学付属マッセルディン図書館(略)と、ストランドの合衆国立公文書館分室(略)に、数日僅きに交互に通うという日課を繰り返していた。

私は、九ヵ月間と限られたワシントン滞在中に、日本占領中米占領軍が行った新聞、雑誌等の検閲の実体を、できるだけ明らかにしたいと考えた。

帰国後、直ぐに刊行した『一九四六年憲法―その拘束』(文藝春秋刊、一九八〇

年)という著書がある。それは、戦後の新憲法の成立過程に占領軍(アメリカ国家)の意向が大きな影響力としてあったことを示されていたのだが、まさしく、そのことと緊がっている。わたしが驚いたのは、江藤淳ほどの優れた批評家が、戦後占領下でのアメリカ支配を傍証するために、公開されている公文書を丹念に調べていく努力をなんとなく空しく感じたからだ。

さて、本書は「資料館に関心のある学生及び一般の方が海外アーカイブや図書館で資料調査するのに、役立つような情報を記載した」(はじめのいき)もので、全三章(Ⅰアメリカのアーカイブ、Ⅱヨーロッパ、Ⅲオセアニア・アジア)で構成している。

著者が初めて海外の資料館を訪れたのは、驚くことに「ワシントンD.C.の米国立公文書館ストランド分館」だった。しかし、「狙った資料がなかなか出てこなかったことを思い出す」(「同前」)と述べている。

不思議な繋がりを感じながら、本書の頁を開いていくと、開巻、「ワシントンD.C.のアーカイブから紹介したい」として、米国立公文書館本館が、次に米国立公文書館Ⅱ、米国議会図書館などが引かれ、メリーランド大学ブランゲコレクションも紹介されている。

本書では、入館から閲覧の手続き、資料のコピーや撮影の可否などを細かく示しながら、さらには、昼食の場所、交通機関、宿泊の場所などが記載されている。わたしが注目したのは、それぞれの地域の古書店も紹介していることだ。確かに、五十年、七十年といった時間性を射程にして、いけば、関連する刊行書は、新刊書店ではなく、当然、古書店ということになる。

例えば、「D.C.の古本屋情報」として「Second Story Booksを次のように記述している。

「Dupont Circle店の他に、郊外にも大きな倉庫があり、そこでは朝から晩まで古書とにらめっこできる。アメリカ史、軍事史、理科系の本などありとあらゆるものが並んでいる。(略)アーカイブが閉館の日曜日には、ここで本三昧である。」

ところで、問題がないわけでもない。米国議会図書館では、「予算カット、人員削減の猛吹雪がブッシュ政権、オバマ政権の時代に吹き荒れた」という。「専門職が米図書館のやり方であったが、人手不足で様々な職種を掛け持ちしなければならぬ」とい

り、組織の統合が進んで、「世界の知の宝庫がこんなことでいいのだっか」と疑義を呈している。

本書の最後(あとがき)で著者は次のように述べる。「資料がなければ、イデオロギーだけの歴史解釈に陥ってしまう。資料によって、相手が何を考えていたのか理解でき、様々な解釈ができる」とがわかるであろう。」

もちろん、いまなら「イデオロギーだけの歴史解釈に陥る」とは理解できる。それは、ひとつの考え方、あるいはアプローチの仕方があることは、わかっているつもりだ。だから四十年前の江藤淳がアメリカ、ワシントンの資料館に通いつめて行ったことの意義を、いまのわたしは、敬意を表する思いしかない。

(評論家)